



なごや「聖歌」だより 5月号'09

礼拝は面白い？

他教派から帰正された方に「なぜ正教会に？」と質問しました。「礼拝がメチャメチャ楽しい」というお答えでした。

大斎から受難週をへて復活祭に至る礼拝は、最も古く、最も彩り豊かです。一年に一度だけの特別の歌もたくさん歌われます。正教会の礼拝は五感を総動員して救いの神秘に近づきます。

聖枝祭では手に枝と持って「主の名によって来たるものは崇め讃めらる」と歌って、子供のように主を迎えます。木曜日には最後の晩餐を記憶します。この日ヘルビムの代わりに「神の子よ、今我を爾が機密の宴にあずかる者として容れたまえ」と領聖祝文の一節が歌われます。その晩行われる十二福音では、ロウソクを灯し、ひざまずいて、受難の福音に耳を傾けます。そのたびに「主よ、光栄は爾の寛忍に帰す」と歌います。翌、金曜日には特別のメロディで「尊きイオシフ」を歌い、アリマフエアのイオシフとともに、主を十字架から下ろし、花で飾り、伏拝します。

聖大土曜日の早課では118聖詠「道にきずなき者」と讚美詞が歌われます。この聖詠は私たちの埋葬の時も歌われます。主の十字架を悼む歌は、第三スタチアにはいと勝利の喜びを秘めたメロディにかわってゆきます。そして福音の前に歌われるアリルイアは5調で、挿入句は「神は興き、その仇は散るべし」。パスハのトロパリも、スティヒラも5調。まだ明らかにではありませんが、このときすでに復活が暗示されています。

そして復活祭。真っ暗な十字行から戻った私たち



を迎えるのは、白く輝く聖堂、花、光、「ハリストス死より復活し」の力強い歌声です。

本を読んでも理解できない、人智を超えた真実が礼拝の中で解き明かされ実感されます。

正教会の礼拝は人間が作ったものではありません。二千年、ユダヤ教時代から考えればそれ以上の時間の中で、各地の教会に聖神が働き、積み重ねてきたものです。私たちも今それに参加し、聖神の恵みに助けられて、復活の喜びを実感し、新しい、生きた伝統をまたひとつ積み重ねてゆきます。

「ハリストス復活」「実に復活」

聖歌練習

♪名古屋:

○代式後の基礎練習。5月10日

代式祈祷は「お休み」ではありません。司祭不在の時、信徒が代わりに「礼拝を守る」日です。

♪半田: 5月13日(水) 11:45ごろから

5月の指揮当番	24日	マリア松島	
3日	ピーメン松島	31日	エレナ広石
17日	エレナ広石		

ズナメニ研究会 再開 第2回

5月27日水曜日1:30から

ズナメニ聖歌の研究会を再開しました。内容としては、五線譜とクリュキー(記号)の両方が書かれた資料を手引きに、記号の読み方の練習、19世紀に採譜され四角音符で記録された聖歌集からスラブ語と日本語で歌ってみる、ズナメニ聖歌を通して正教会の伝統的音楽観、霊的な意味などをゼミ形式で学んでゆきたいと思えます。今月は27日「常に福」6調を歌ってみます。「月1回。日時は毎月「聖歌だより」でお知らせします。

今まで学んだ内容はインターネットで公開中。

<http://www.orthodox-jp.com/liturgy/Znameny/>

この本は20世紀におけるロシア伝統聖歌研究の第一人者J.V. ガードナーが1954年から72年にミュンヘン大学で行った講義「ロシア聖歌の歴史と本質」をもとに執筆し1977年に出版されたものです。原本はロシア語、500ページほどの上下2巻本です。1980年上巻の英訳がV. モロザンによってウラディミル神学校から出版され、ロシアでもアメリカでも正教会聖歌入門の必読図書として、今も幅広く読まれています。わたしも20年前にこの本に出会い、正教会の礼拝と聖歌の基本を学びました。

内容的には前半の半分は正教会の礼拝の構造、聖歌の特徴や礼拝における役割を解説し、残りはロシア聖歌の成立と発展の歴史を詳細に考察します。もともと学術書なので内容的に難しい面もありますが、聖歌や正教会の礼拝を学ぶのに大変優れた書物なので、日本の読者にもわかりやすいように省略したり解説を加えたりしながらご紹介します。全文は下記の「東方正教会の聖歌」のサイトに掲載しています。

第1章 正教会の聖歌の体系、内容と用語法 聖歌の本質、礼拝における役割

ローマ・カトリック教会と正教会では礼拝の構造や考え方に大きな隔たりがあり、そこから礼拝における音楽の意義、教会音楽に対する見解の相違が生じています。プロテスタント諸派とではさらに大きな違いがあります。

まず、正教会では「聖歌とは何か」また「礼拝において音楽はどんな役割を果たすか」の二点を考えてみましょう。

よく耳にする定義づけは「正教会の聖歌は声楽の一種で、人間の声だけで構成され、ことばと結びれて礼拝に付随する」です。ここ3世紀ほどのロシア合唱聖歌に限定するなら、これで十分かもしれません。実際、教会外の宗教音楽研究会などでは、聖歌を声楽の一分野として音楽美学のものさしで測り、あげくは「音楽的に取るに足らない」と片付けられてしまうことがあります。この観点から見れば、聖歌は「礼拝に内在する固有なものではなく、『随意的』なもので非本質的なもの」ということになります。

(訳注) プロテスタント教会ではその日に歌う賛美歌は参加者や司祭者が自由に選ぶことができますが、正教会ではその日その時に何の歌を歌うかは祈禱書や奉事規定によって定められています。聖歌は礼拝の本質的な要素で、勝手に差し替えることはできません。また西洋近代音楽の一分野として発展した宗教音楽はその目的が教会の礼拝から、個人の芸術性の表現となってゆきました。正教会の聖歌は、チャイコフスキーやラフマニノフの作品であっても礼拝での使用を前提に作られています。(実用的かどうかは別問題です。)

同じ理由からあまり理解されていないのが、なぜ正

教会はいかなるタイプの楽器をも、伴奏としてさえも礼拝に取り入れなかったかという点です。

器楽の禁制は一般的に、正教会や東方教会の全般の特徴である修道的傾向から説明されてきました。ロシアの歴史家や理論家は聖師父のことばを引いて「宗教的儀式に楽器を用いることは異教人の間で広く行われていた。クリスチャンは神を讃美するとき、生命のない人工的なものではなく、最も崇高で自然な楽器である人間の声を用いるべきだ」と説明してきました。

ロシアやほかのスラブ系正教会は正教を受容したとき、すでに器楽の禁制が確立していたギリシア・ビザンティン教会から伝統をそのまま受け継ぎました。しかし、なぜ正教会が器楽を徹底的に排除したかの理由を聖歌の本質と礼拝上の役割という点からもう一度考えてみましょう。

音楽の感情的側面は正教会の礼拝でも重要視されますが、器楽を礼拝に用いる教会とは考え方が異なります。器楽など、ことばのない音楽は寂しさ、荘厳さ、喜びといったある種のムードや雰囲気を作り出しますが、そこには具体的で明確な考えは表されません。寂しさ、荘厳さ、美しさといった感情的要素を呼び起こし、表現し、各々の聴き手は主観的に受け取り、そこから多様な解釈が生まれます。

正教会の礼拝は、祈り(祝文)、讃美、教え、聖書注釈、説教など、さまざまな形の「ことば」の表現で構成されています。「ことば」は具体的論理的に構築された内容を正確に表現します。「ことば」は音楽と結びれて、明確な論理や正確な意味に感情的反応を合体させることができます。器楽はことばを持たないので、言語によって提示しうる具体的内容を伝達することができません。

だから、正教会はことばと結びついた場合に限りて音楽を奉神礼に取り入れることを許しました。音楽的な音は祈禱書のテキスト(祈禱文)の論理的具体的な内容を感情的に色づけし、あるいは、音楽によって引き起こされた感情をことばによって具体的に説明します。

無伴奏聖歌の場合、感情的反応は音楽が造り出す単なるムードではなく、テキストに著された具体的な内容への反応として生まれ、テキストと一体となった歌はそれを反映します。

ズナメニイなどの古聖歌(チャント)の場合、メロディの定型はさまざまなテキストに用いられますが、感情的特徴はそのメロディを生み出した国民の音楽的特性、すなわち歌詞に表された考えを理解するときの受け取り方に一致します。

Johan von Gardner, *Russia Church Singing*, SVS

ホームページのご案内

○「なごや聖歌だより」のホームページ

<http://www.orthodox-jp.com/music>

なごや聖歌だよりのホームページの表紙で名古屋教会の聖歌が聞けます。「聖歌だより」のバックナンバーもダウンロードできます。

○ 東方正教会の聖歌 <http://www.orthodox-jp.com/maria>

詳しく学びたい方のため正教会聖歌の特徴、聖歌の神学、歴史、など海外の資料も多数翻訳して掲載しています。

○ 正教会奉神礼研究 *Liturgia*

<http://www.orthodox-jp.com/liturgia> 奉神礼や聖歌の実践資料